

カリキュラムデザイン論

新しい歴史学習理論としてのの

「理論批判学習」

方法と授業構成原理

3班

論文：高校歴史単元開発の方法

－理論の選択と組織を中心に－ 原田智仁

1、問題の所在

■ 歴史の
何ら

一つの説明仮定

かかわらず
扱っている

教師は自ら選択した理論を明示し、その妥当性を生徒自身に批判的に吟味・検証させる過程として授業を組織しなければならない

※プレゼンにあたって

- 例として「Bインド世界の形成と展開」
～カースト制度理論～
(筆者が以前開発した教授計画書
→プレゼン内に画像を引用)
- p 5 4 L 1 2
「問題を一つ一つ明らかにし」
→論文の構成が一問一答式
以下MQ, SQ構成で解説していく

プレゼンにおける構成

M Q : 「理論批判学習」の方法・授業構成原理

S Q 1 : 主題設定の根拠は？

S Q 2 : 歴史の理論とはどんなものか？

S Q 3 : 主題に対する理論を

どのように選択していくか？

=カースト制度を選択した根拠は？

S Q 4 : 理論の教育的加工の方法とは？

S Q 1 : 主題設定の根拠は？

世界史構成の基本的枠組みを考えると・・・
(筆者の挙げる主題設定の根拠)

・ 文明史的な枠組み (主に前近代世界史)

• Ex) 古代文明、イスラム文明 → 縦のまとめ

・ 同時代的な枠組み (主に近現代世界史)

• Ex) 大航海時代、市民革命 → 横のまとめ

世界史の理論選択の根拠は

主に前近代世界史

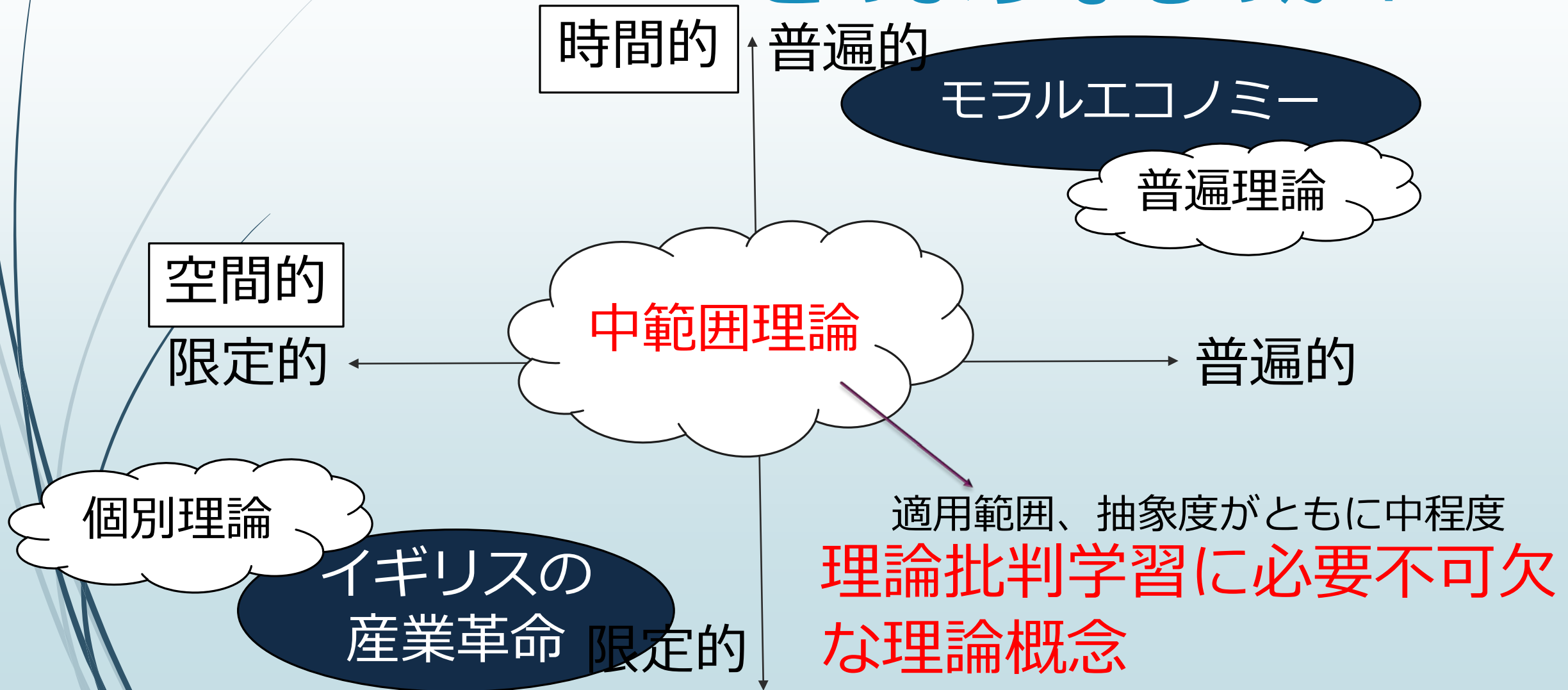
- ① 諸文明・諸地域世界

主に近現代世界史

- ② 国際関係ないしは世界システム

世界史構成の枠組みに根拠を求めた主題設定

S Q 2 : 歴史の理論とは どのようなものか？



前近代史

文明固有の中範囲理論

国際関係の中範囲理論

近現代史

適切な
理論

【理論の集合】

例) カースト制度

S Q 3 : カースト制度を「インド社会の形成と展開」に対する理論として選択した根拠は？



条件

- ① 主題としてのインド史の意義：**世界史像の形成**
→インド世界史ないし、インド文明を
合理的に説明できること
- ② **開かれた歴史認識の形成**を意図する世界史教育
→インド史学習によって
日本社会を相対的にわかる

- ① 当該地域世界の歴史的特質を
最も合理的に説明する理論
- ② 当該地域世界の現代の
社会構造を説明する理論



+ a

理論と生徒をつなぐ条件

③生徒の日常生活ないし問題意識と
どこかで接点を見出さうる理論

Ex)カースト制度と日本における
身分制度 (= 士農工商等)

「教育内容としての歴史理論は基本的に
構造史の理論でなければならない」

SSQ : 構造史とは？

構造の概念

事件史

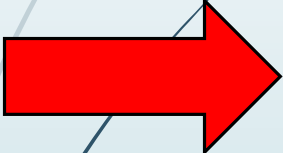
短期的に激しく変動する出来事を記述する
Ex) 戦争、政変、革命

構造史

長期にわたって持続する要素をとらえる
Ex) 社会制度、経済の仕組み、文化

構造史

A～E（前近代史）：諸文明の通時構造
F・G（近現代史）：世界の共時構造



それぞれの構造に着目し、その歴史的特質をとらえれば、限られた授業時間内での学習が可能となる。

A～Eであれば現代的視野からの考察、自文化との比較が可能
F・Gであればグローバルな視野、多角的な視点の獲得が可能

理論の選択はあくまで教育内容づくりの緒

S Q 4 : 理論の教育的加工の方法とは？

理論に関する学問研究の成果の中から教育内容として必要な理論を確定し組織化していく作業が必要

① 選択した理論の体系的把握

図 1 参照

- 最先端の研究を参照
- 可能な限り研究者の論理に即した理論の構造化
- 理論の全体、あるいは主要部分を構造図に表す
→ 全体像の把握

注 1 8 から原田氏は体系化のために研究所 3 冊+百科事典を用いている

②事例の論理の選択

価値注入

理論をそのまま教授すること
→具体的事例をもとに
生徒自身によって吟味・習得される必要

事例の一般的条件

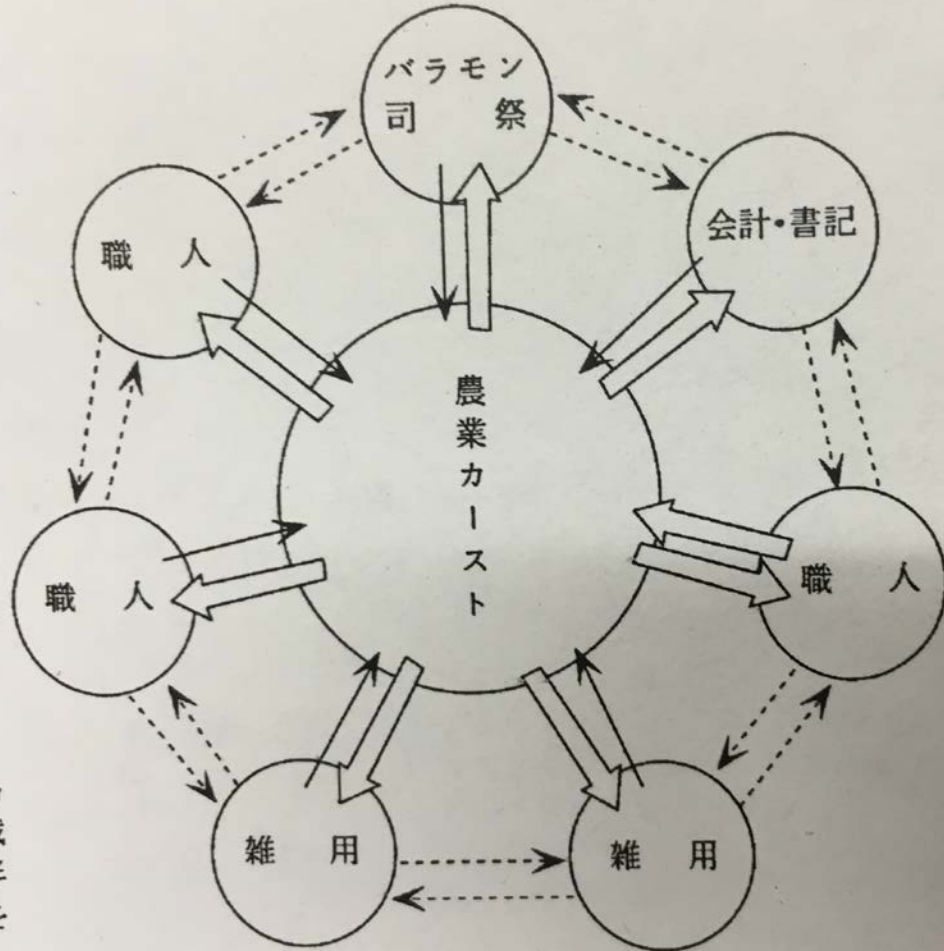
- ①事例の分析を通して理論を発見・創造、
吟味・検証する手掛かりとなるもの
- ②事例は生徒の読解可能な具体的資料を伴うもの

以上の条件をもとにカースト制度の事例を考察

P 5 9 枠内参照

- 1、学問的に重要な内容であっても
適切な事例を書く場合は理論を削除する
表中③カースト制度の成立
- 2、優れた事例があれば、
それに応じて理論体系を組み替える
表中②カースト制度の支柱、豊富な事例
- 3、生徒の事例理解が可能であり、
発見・吟味ができるもの

(25) ジャジマーニー制度



| 区分 | ヴァルナ | ジャーティ (マハラシュトラ州) |
|--------------------|--|--|
| カースト・ヒンドゥ 〈可触民〉 | バラモン | |
| | クシャトリヤ | マラータ (自営農民・地主) |
| | ヴァイシャ | コムティ (商業), ワニ (商業) |
| | シュードラ | ソール (鍛冶屋), ランガリ (菓子づくり), テリ (油搾り) ガルナマリ (果実扱い), ダンガル (羊飼い), バタルワット (石工) |
| アウト・カースト 〈不可触民〉 | ジャーティ | |
| | マハラシュトラ州 | ベンガル州 |
| | チャマール (皮革業・7つのサブカースト) マハール (死牛処理, 葬式準備雑役) クンバール (壺造り, 焼物) ドービー (洗濯) ミナ (農耕) マーング (村の雑役) ビール (狩猟, 皮なめし) バンギー (汚物の清掃) | ナモ (農業), ドサード (豚飼) マロ (漁業) ムチ (皮革) ハリ (清掃と壺造り) ドモ (葬式) チャララ (葬式) プラマニク (床屋) ナーイ (床屋) …ビハール州 |

③生徒の探究の論理に従う

Q：生徒の探究の論理とはどのようなものか？

一般的には・・・

- ・「なぜ」型の問い

→推論による説明に理論の発見や検証の手掛かりが得られる

- ・理論に関する事実認識を確実にする



理論の体系化にみられる歴史研究者の探究の論理
(p 60) をもとにさらに生徒の探究の論理を検討

カースト制度
における

探究の論理から規定される理論の条件

1、理論は「なぜ」という問いを中心に再構成されるべき

①～③ともに「なぜ」型の問いは見られない

→「なぜカースト制度はなくなるのか」

2、理論は単元全体の自然な探求の論理に従って構造化されるべき

自然な探求の論理にするため全体の論理を組み替える

②と③の順序を入れ替える

3、理論はより具体的な問いに対応して命題化されるべき

×「カースト制度を支えているものは何か」抽象的

×「なぜカースト制度はなくなるのか」歴史的視野にかける

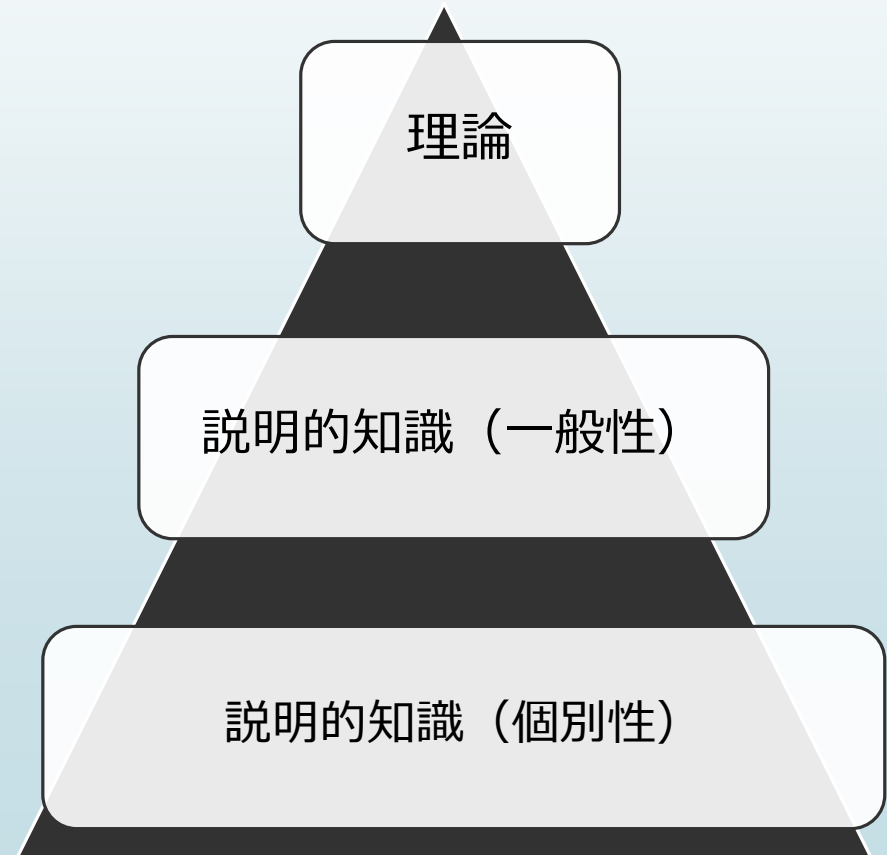
→「なぜカースト制度は2000年もの長期にわたって存続してきたのか」

理論命題の確定と単元構成

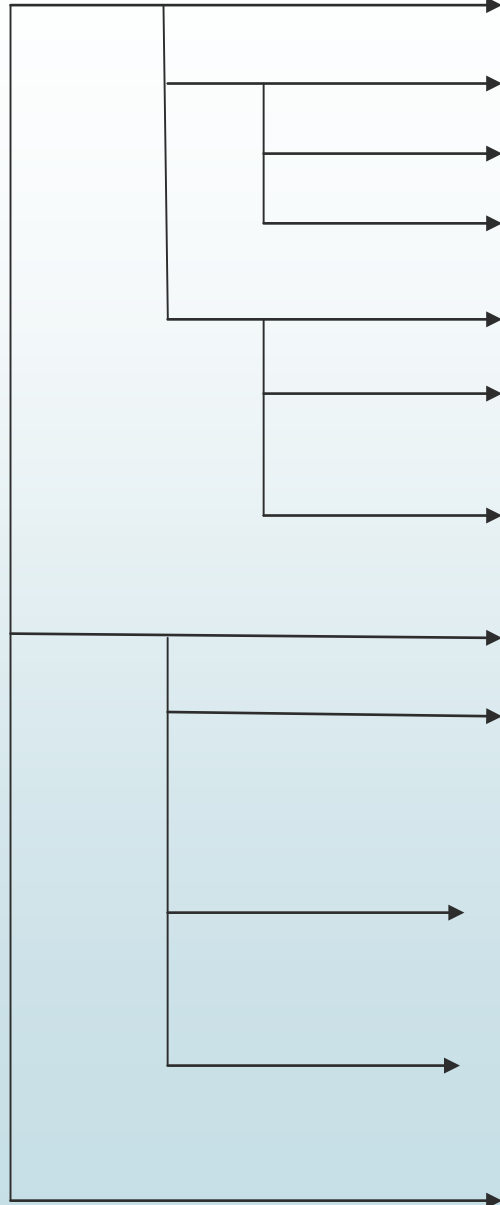
理論を単元の到達目標として位置づけるには、命題の形で構造化することが必要→**知識の構造**

P 6 1 枠内参照

単元はこれらの知識を生徒が批判的に学習していく過程として構成されなければならない



階層的な知識構造



(2) カースト制度の概念的・説明的知識

A ヴァルナとジャーティからなるインドの一体化した社会制度を、カースト制度という。

A-1 インドで歴史的に形成された理念的な階層秩序をヴァルナ制度という。

A-1-1 ヴァルナ制度は、四身分のカースト・ヒンドゥとアウト・カーストからなる。

A-1-2 ヴァルナはジャーティを外から規制する大きな枠組みととらえられる。

A-2 インドで特定の地域・言語・宗教などと結びついた社会集団をジャーティという。

A-2-1 ジャーティはその内部でしか結婚せず、その身分はその中に生まれることにより獲得される。

A-2-2 どのジャーティも四つのヴァルナないしアウト・カーストのいずれかに所属する。

B カースト制度はバラモンの指導下に成立したヴァルナを基盤として、諸要因の複雑な結合によって歴史的に成立した。

B-1 ヴァルナはインド西北部に侵入した白色人種のアーリヤ人が、黒色系の先住民を征服・支配したことに端を発し、その後ガンジス川流域に移動し小国家を建設する過程で社会の階層化と固定化が進み、四種姓が成立した。

B-2 アーリヤ人社会の地理的拡大とともに先住民との混血や新たな部族の同化が進み、社会の細分化が進行した結果、各種の職業と結びついたジャーティが成立した。

B-3 アーリヤ人社会の拡大とヴァルナの秩序的秩序の確立の過程で、未開な部族民などヴァルナ社会の周辺に住む人人を不可触視する傾向が生まれた。

C カースト制度は、上からのカースト化、下からのカースト化

おわりに

教師は自分で授業を作るしかない。

→ 現実に可能な範囲で、より弁護のできる
教育内容を自ら決めていかざるを得ない

原理

学問的理論体系を事例と探究の論理によって吟味し、教育内容としての理論に再構成していくというものである。

重要センテンス

- 生徒の歴史認識をより開かれたものにするためには、教師は自ら選択した理論を明示し、その妥当性を生徒自身に批判的に吟味・検証させる過程として、授業を組織しなければならない。
- 前近代史に関しては文明固有の中範囲理論が、また近現代史に関しては国際関係の中範囲理論が、教育内容として最も有効であろう。
- 「教育内容としての歴史理論は、基本的に構造史の理論でなければならない」
- 生徒の既存の認識を揺さぶり、知的好奇心を刺激して探究を促すような事例が求められるのである。
- 理論を単元の到達目標として位置づけるには、命題の形で構造化することが必要である。
- 単元はこれらの知識（知識の構造）を生徒が批判的に学習していく過程として構成されねばならない。
- 学問的理論体系を事例と探究の論理によって吟味し、教育内容としての理論に再構成していくというものである。